



Title	大伴旅人「歌詞両首について」
Author(s)	廣川, 晶輝
Citation	国語国文研究, 136, 26-42
Issue Date	2009-07-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93274
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_136-26-42.pdf



大伴旅人「歌詞兩首」について

廣 川 晶 輝

一 はじめに

『万葉集』巻五には、次の一連の書簡および贈答歌が載っている。⁽¹⁾

伏尋ニ来書一 具承ニ芳旨一 忽成ニ隔レ漢之戀一 復傷ニ抱レ梁之意一
唯羨去留無レ恙 遂待ニ披雲一耳

歌詞兩首 大宰帥大伴卿

龍の馬も 今も得てしか あをによし 奈良の都に 行きて来む
ため(5・八〇六)
現には 逢ふよしもなし ぬばたまの 夜の夢にを 繼ぎて見え
こそ(5・八〇七)

答歌二首

龍の馬を 吾れは求めむ あをによし 奈良の都に 来む人の
たに(5・八〇八)

直に逢はず あらくも多く しきたへの 枕去らずて 夢にし見えむ(5・八〇九)

この書簡には從來さまざまな説明が試みられており、相当複雑な様相を呈している。本稿の最初にあたり、その複雑な様相を腑分けし整理することが必要不可欠であるが、その腑分けと整理を手際よく成すには、この書簡が大きく見て二つの対立軸に基づいて問題とされている、ということを見定める必要がある。

その一つ目の対立軸は、この書簡が、「奈良の都の或る人物の書簡なのか／大伴旅人の書簡なのか」である。

まず、「奈良の都の或る人物の書簡」説に立つ論を見てみよう。契沖『万葉代匠記』(初稿本)は、

これは帥大伴卿より、都の大伴淡等か方へ状をつかはさるゝに、二首の哥を添られける其返翰ならひに返哥なり。大伴卿の哥、すなはち初に載たり。(波線、廣川。以下同じ)

と指摘し、都からの書簡であると見なした。波線部からは、契沖が初稿本の段階では、巻五・八一〇番歌前置漢文に見られる「大伴淡等」と大伴旅人とは考えていなかったことがうかがわれる。³なお、『代匠記』（精撰本）では、波線部が「故郷奈良ノ旧知へ」と改められている。つまり、契沖は、「故郷奈良ノ旧知」からの「返翰」と捉えたわけである。

ところで、この立場に立つ鹿持雅澄『万葉集古義』はさらに、「伏辱云々の書牘、此処にあるは、甚く錯乱たるものなり」として、この書簡を八〇八・八〇九番歌の前に移すという処置を施している。しかし、現存する『万葉集』の諸本はすべて、冒頭に掲げた本文の順番のとおりである。雅澄の処置はさかしらな処置と言えよう。また、武田祐吉氏『万葉集全註釈』は、

この書簡の文章は返書であるから、もし旅人の書とする時は、更にこの前に京人からの書があつた筈であり、しかも歌に依れば、また更にこの後にも京人からの書があつたことになる。これは普通の交遊事情から見てかなり特殊の場合である。と判断し、この書簡が旅人の書簡ではないとする立場に立つ。そして、

然らば、どうしてこの文の次に旅人の二首が載つてゐるかとならば、それは京人の書簡の余白に、旅人または大伴家側の人が、旅人の歌を書き込んで置いたものと考へられる。旅人の書に対する京人某の返書と見るを至当とする。

と述べるのである。⁵しかし、これも推測の域を出ないことは言うまでもない。

また、書簡の「抱梁之意」は、『莊子』（外篇、盜跖第二十九）に載る故事にちなむ。橋の下で女と逢う約束をしていた尾生という名の男が、女が来るのを待つていたが女は来ず、水かさが増して尾生は橋の柱を抱いたまま死んだという故事である。こうした故事が引用されているところから、ここでは「待つ」側の都の或る人物からの書簡であると説く説もある。『万葉代匠記』（初稿本）の「マコト待三帰洛未三還到一也」や、『全註釈』の「旅人の来るを待つて、しかも旅人の来らず、徒に心を傷めることを述べてゐる」という説である。しかし、『代匠記』は、精撰本の改稿においては右の指摘を取り下げ、「交情ヲ忘サルニタトフ」とだけ記している。また、岸本由豆流『万葉集攷証』が「この故事をちぎりのわすれがたきにたとへたり。」とし、森本治吉氏『万葉集総釈』が「愛と信との深いことをいふのである。」とする解釈に立てば、これは、どちらが待つのかというところにポイントがあるのではなく、信義の深さにポイントがあることになる。事実、『莊子』（外篇、盜跖第二十九）では、前述の故事の記述のしばらく後に、この尾生の故事に対しての「信之患也」（信義を守ろうとしたことによる難儀）という記述を見る。この尾生の故事は、やはり、奈良の都の或る人物からの書簡であることの論拠とは成り得ない。

次に、「大伴旅人の書簡」説を見てみよう。『攷証』は、「この書牘は、京人へ旅人卿よりの返簡なり。」とし、鴻巣盛廣氏『万葉集全釈』も同様の立場に立つ。そして、『全釈』は、

代匠記・略解・古義に、これを京人より旅人への返簡としたのは非常な誤謬である。

と述べ、「奈良の都の或る人物の書簡」説側を批判する。また、伊藤博氏『万葉集釈注』は、

旅人の歌の題詞にことさら「歌詞」と記しているのは前の序文（漢文を意識してのものと思われるので、この異説前掲『全註釈』の、「旅人または大伴家側の人々が、旅人の歌を書き込んで置いた」とする説のこと。廣川注）には従わない。

と独自の視点から指摘している。

こうした「奈良の都の或る人物の書簡なのか／大伴旅人の書簡なのか」という対立軸は、実は、現代に至っても決して解決されていくわけではない。たとえば、近時（一九九九年五月）の新日本古典文学大系版『万葉集』は、

奈良某人の手紙とその歌との間に、先行する大伴旅人からの贈歌を注記したものの。

と指摘し、右に挙げた『全註釈』の説を採用している。また、近時（二〇〇〇年九月）の西一夫氏「憶良・旅人の言葉と典拠」⁽⁷⁾は、「旅人が贈った短歌二首を」「奈良の某人が」「自らの書簡文に取り込」んだと推察している。

二つ目の対立軸について見てみよう。それは、「奈良の都の或る人物」が、「男性なのか／女性なのか」である。

まず、女性説について見てみよう。土屋文明氏『万葉集私注』は、さて奈良にあつて手紙の相手となつたのは何人か。記載がないのであるから推測に止るけれども、多分旅人と相愛関係にあつた人であらう。

と述べて、「相愛関係」にあった女性を想定し、

丹生女王贈大宰帥大伴卿 歌二首（『万葉集』巻4・五三三、五四番歌題詞）

という大宰府の大伴旅人に相聞歌を贈った記述が実際に見られる丹生女王を推定している。『私注』より前には「女性」説が提唱されて来なかったわけであり、澤瀉久孝氏『万葉集注釈』は、この「私注」に対して、「うなづかれる説だと思ふ」と述べている。

次に、男性説について見てみよう。これは「私注」説を批判すること従来の見解への回帰となつている論である。たとえば、日本古典文学全集版『万葉集』は、

相聞らしい用語は単なる文学表現とみて、男性と考えるほうがよからう。

と述べている。

しかし、この対立軸も解決できないのは一目瞭然であろう。つまり、実際に相手が「相愛関係」にある女性であつたならば相聞の表現を用いるのは当たり前であるし、相手が男性であつたならば官人同士の親愛の情を表明するために、相聞表現を援用することも十分にあり得るからだ。詰まるところ、この書簡が誰に対しての書簡なのか明示されていない以上、また、「答歌二首」が誰の歌なのか明示されていない以上、この対立軸は解決できないのである。

さらに、問題は複雑化している。つまり、右に見た『私注』にしろ『全集』にしろ、一つ目の対立軸の「大伴旅人の書簡」説に立っているわけであるが、逆に「奈良の都の或る人物の書簡」説に立って、「女性」説を採る論も存在しているからである。吉永登氏「大宰帥大伴卿の贈答歌」⁽⁸⁾は、「奈良の都の或る人物の書簡」説に立ちつつ、

漢文で書かれた書簡の作者である以上、これを女性とみることは難色があろう。

と述べる。女性に漢文を書かないだろうという理解が根底にあるわけである。この吉永論文に対して、井村哲夫氏『万葉集全注 巻第五』は、

貴族階級の女性のためには記室の代筆ということもあり得るだろう。

と述べて批判を加えている。

このように、

○この書簡が、「奈良の都の或る人物の書簡なのか／大伴旅人の書簡なのか」

○「奈良の都の或る人物」が、「男性なのか／女性なのか」という二つの対立軸は絡み合い錯綜して、問題は複雑な様相を呈しているわけである。

ところで、ここまでは複雑ではありながらも、書簡が〔奈良―大宰府〕間を（その方向はともかくとして）実際に運ばれた、ということを前提とした論であった。しかし、さらには、この書簡のやりとりおよび歌の贈答自体が、まったくの創作であり虚構であるとすると論も出ているのである。

土田知男氏「大伴旅人・京人贈答歌私考」⁽⁹⁾は、

この答歌も旅人の手に成るものではないかと思う。すなわち、この贈答歌はことごとく旅人の創作に成るものであって、答歌は女性に仮託した作と考えられる。

と述べている。

しかし、土田論文のように、「ことごとく旅人の創作」であると把握できるのであろうか。本稿冒頭の本文では、書き下しで示しているために、はっきりとわからないのであるが、八〇六・八〇七番歌と八〇八・八〇九番歌では、その万葉仮名の使用において違いが見られる。原文を示してみよう。

歌詞兩首 大宰帥大伴卿

多都能馬母 伊麻勿愛豆之可 阿遠尔与志 奈良乃美夜古尔
由吉帝己牟丹米（五・八〇六）
宇豆都仁波 安布余志勿奈子 奴婆多麻能 用流能伊味仁越
都伎提美延許曾（五・八〇七）

答歌二首

多都乃麻乎 阿礼波毛等米牟 阿遠尔与志 奈良乃美夜古迹
許牟比等乃多仁（五・八〇八）
多随尔阿波須 阿良久毛於保久 志岐多閑乃 麻久良佐良受提
伊米尔之美延牟（五・八〇九）

この万葉仮名の使用については、稲岡耕二氏「巻五の論」⁽¹⁰⁾の見解が参照される。稲岡論文は八〇六番歌の表記について、

一首三十一字二十四音を表記するのに三十字種を用い、シ・タ・テ・ノ（ㄟ）・マ・モ（ㄟ）の六音の表記にそれぞれ之志、多丹、弓帝、乃能、馬麻、母勿の二字を宛て、わずかに余（右の原文引用中の「尔」に同じ。廣川注を再度使っているにすぎないという、特殊な傾向をみせている。

と指摘する。八〇八・八〇九番歌にはこの傾向は見られない。また、稲岡論文は、八〇八・八〇九番歌の表記について、

「毛等米」「阿良久毛」というモの表記は、古事記における甲乙二類の区別からすれば乙類のモであるべきところ、「毛」と記されていて異例である。

と指摘する。「毛」は甲類の仮名である。つまり、八〇八・八〇九番歌には、「モ」の甲類・乙類の書き分けの意識が無いということになる。一方、八〇六番歌の「多都能馬母」の「母」は乙類の仮名である。「古事記」に残存する甲類・乙類の書き分けから、助詞「も」としては乙類の仮名が要求されることがわかるのであり、その要求と合致するわけである。両者の仮名表記は明らかに相違するのだ。これは決定的な違いである。また、八〇九番歌の「阿波須」は、冒頭の書き下し本文にあるように、「逢はず」であり、「須」が濁音「ズ」に宛てられている。この点について稲岡論文は、

憶良作歌や旅人作歌では、須は清音スの表記に限られている。

と指摘している。旅人作、巻五・七九三番歌の「麻須万須」は「ますます」であるから、この稲岡論文の指摘も決定的であろう。いまは紙数の関係上、稲岡論文の論拠を多くは挙げられないが、稲岡論文は種々の論拠を挙げて、

結局、八〇八・八〇九の二首の文字遣いは京人某の原歌の文字遣いがほぼそのまま保存されたゆえに、憶良・旅人の歌とは異なつた特殊な性格がそこに指摘されるものと思う。

との結論を得ている。

さて、こうなると土田論文の論は成り立たないことになる。しかし、土田論文では、「別人の作なることを装うたためであろう。」という解釈によって、この表記の相違という点をすり抜けようとする。

しかし、こう言つてしまった時点で、論証不可能となつてしまう。つまり、土田論文の論旨にとつては対立するはずの「別人の作だから表記も異なる」という論を完全に否定することも出来ないからだ。まさに袋小路に嵌り込んでしまつていと言えり。⁽¹⁾

この書簡および贈答歌を扱った近時の論考に露木悟義氏「龍の馬の贈答歌」がある。この論考は、一九七〇年代から現代までの研究を俯瞰しつつ、「新しい展開の方向性を示そうと」「企図」された『セミナー万葉の歌人と作品』シリーズに収められている。しかし、この露木論文では、「奈良の都の或る人物」を藤原房前と推定するところに着意している。このことが象徴するように、この書簡および贈答歌をめぐる論は、誰が贈つたのかなどの事実の「解明」がその目的とされて来たのである。

ここは、冷静な目で見てみたい。これまでの研究では、右にすで見えた二つの対立軸およびそれに関連する問題の「解明」に悪戦苦闘し、「解明」にもがくあまり、作品の表現の質を追究するという作品論の当たり前の部分が、どこかに置き去りにされて来たのではないだろうか。現に、書簡の表現と「歌詞両首」「答歌二首」の表現との関わりを論じる見解が、意外にも無いのである。しかし、これは、事実の「解明」が論の目的とされて来た現状では、ある意味当然と言え当然で、書簡が誰の手に成つたものなのかという定点が得られないからという理由で、踏み込んだ考察することに躊躇していたのかもしれない。この意味でも、まさに袋小路である。

もちろん、本稿としても、事実の「解明」をないがしろに考えているわけではない。事実が「解明」されることによって、新たな作

品理解の地平が拡がるのなら、幸運であると考えている。しかし、事実の「解明」が難しいから表現分析が停止してしまっているのは本末転倒ではなからうか。

以上、随分と長い「はじめに」となってしまった。しかし、この一連の書簡および贈答歌が置かれている現状および限界を把握し、止揚したうえで新たな局面に向かうためには、必要な記述であった。本稿としては、以後、「龍の馬」という表現の分析を中心に据えて、この一連の書簡および贈答歌の「表現の質」を追究することを目指すしたい。

二 書簡と贈答歌の表現について

(一) 〈距離〉の認識

(1) 「忽成三隔漢之戀」について

書簡の「忽成三隔漢之戀」の部分について、北村季吟「万葉拾穂抄」は、

漢は天河也。牛女天漢を隔て恋る如く、筑紫と奈良遥にて恋る心也。

と指摘し、『万葉集全釈』は、

この句は山河千里を隔てた、京人の恋しさが胸に湧いたといふのである。

と指摘する。この「筑紫と奈良遥にて」「山河千里を隔てた」という記述に明らかのように、この「忽成三隔漢之戀」には、大宰府と奈良の都との間の〈距離〉の認識があり、〈距離〉を内在させていると

言つて良いだろう。

(2) 「去留」について

また、書簡の「去留」の部分について、『全釈』は、

去留は旅に出た者も、都に留つてゐる者もの意。即ち旅人と京人との兩人をさしたのである。

と指摘している。また、小島憲之氏「遊仙窟の投げた影」⁽¹⁵⁾は、

巻五(八〇六、八〇七)の書翰(旅人説が有之)の中の「唯羨去留無恙、遂待三披雲耳」の「去留」も、文選琴賦「委性命二分任去留」を始めてその他例がみえるが、遊仙窟の前述の一文「所恨別易会難、去留乖隔」にも例がある。何れにせよ、文選のほかに筑紫歌壇の歌人の歌袋には「遊仙窟」が大きな地位を占めてゐたものと云へるであらう。

と指摘する。また、日本古典文学全集版『万葉集』も、『遊仙窟』の用例を参照し、「二人が離ればなれになること。」と指摘する。やはり、書簡の「去留」の表現の基盤にも、大宰府と奈良の都との間の〈距離〉の認識があり、ここにも〈距離〉が内在していると言える。

(3) 「龍の馬」について

次に、八〇六番歌の「龍の馬」について見てみたい。「拾穂抄」は、「愚案」文選十四緒白馬賦曰、馬以龍名。善ヲ註ニ曰、周礼ニ曰、凡馬八尺已上為龍。

と早くに指摘し、小島憲之氏「万葉集と中国文学との交流」⁽¹⁶⁾も、「龍の馬」も「龍馬」(二例、玉台新詠襄陽白銅鞮歌「龍馬紫金鞍」、謝朓送遠曲「方衛控龍馬」)の翻説語の一例であり、その当時新しい歌語として歌人達に新鮮味を感じさせようとしたものであらう。

と指摘している。しかし、一方、佐佐木信綱氏『評釈万葉集』は、「龍の馬」について、

諸註、漢語「龍馬」の直訳訓とし、周礼をひいて良大の馬とするは不可。龍の馬とは、上帝の御して天空を馳駆するといふ「天馬」の謂で、漢書の礼樂志に「武帝天馬歌、天馬徠今龍之媒」とあるにより、天馬のことを龍媒ともいうたのである。（後には龍媒をもすぐれた馬の意に用ゐる。）さて右の典故により「龍の馬」の語を造り、（訓読と見る必要はない。）その内容としては「穆天子伝」等に禿八駿の伝説等を思ひよそへたものである。こ

こはその意。

と指摘している。これは、きわめて重要な指摘であると言えよう。佐佐木氏は、『漢書』（卷二十二、礼樂志）の「天馬歌」の「龍之媒」という記述を媒介として、「龍の馬」と「天馬」との間の通路を確保しようとするのである。小島憲之氏「日本書紀の述作」¹⁷⁾に拠れば、『日本書紀』の記述には『漢書』の記述を利用し潤色した箇所が二十箇所も存在するという。日本上代の知識人にとって、『漢書』は重要な位置にあったと言えよう。また、芳賀紀雄氏「典籍受容の諸問題」¹⁸⁾は、令制下の学制で大学寮の学科の一つであった文章の学科では、『文選』『爾雅』に加えて、『史記』『漢書』『後漢書』が重んぜられたことを説いている。

佐佐木氏の紹介する『漢書』（卷二十一、礼樂志）の「天馬歌」を次に掲げよう。¹⁹⁾

太一況，天馬下，霑赤汗，沫流赭。志傲儻，精權奇，籀浮雲，
晡上馳。體容與，遡萬里，今安匹，龍為友。元狩三年馬生渥

注水中作。

天馬徠，從西極，涉流沙，九夷服。天馬徠，出泉水，虎脊兩，
化若鬼。天馬徠，歷無草，徑千里，循東道。天馬徠，執徐時，將
搖舉，誰與期？天馬徠，開遠門，竦予身，逝昆侖。天馬徠，龍
之媒，游閭闔，觀玉臺。太初四年誅宛王獲宛馬作。

天馬十

佐佐木氏の指摘では、右の「天馬歌」の最後に近い部分の「天馬徠，龍之媒」を挙げているわけであるが、本稿としては、四角囲みの部分にも注目したい。「遡萬里」とあるように、万里を超えて行くことが描かれる。また、「今安匹，龍為友。」とある。ここには、初唐の顔師古の注が付いている。前掲小島憲之氏「日本書紀の述作」は、日本上代において顔師古注の『漢書』が使用されたことを説いている。ゆえに、この顔師古注も、参照されよう。顔師古注には、「言今更無與匹者，唯龍可為之友耳。」とある。²⁰⁾つまり、この天馬には、匹敵するものが皆無であり、龍だけが友となることができるとある。この四角囲み部分の把握によつて、佐佐木氏が目指した、「龍の馬」と「天馬」との間の通路の確保は、より確かなものとなろう。

また、この佐佐木氏の指摘を引き継ぐのが、新日本古典文学大系版『万葉集』である。そこでは、

「てしか」を含む類歌（二六七六・三六七六・四四三三）における雲・雁・ヒバリに同じく、この「竜の馬」も空を飛ぶものとして想像されている。「竜の馬」は従来八尺以上の馬を言う「竜馬」（周礼など）の翻訳語と解釈されてきたが、漢語「竜馬」は「竜馬」とは仁馬、河水の精なり。：酪上に翼有り」（瑞応図・芸

文類聚・祥瑞部・馬」と、羽翼を持つものでもあり、(後略)と指摘されている。その指摘のとおり確かに『芸文類聚』(卷九十九、祥瑞部下、馬)には、

瑞應圖曰、……又曰、龍馬者、仁馬、河水之精也、高八尺五寸、長頸、鬣上有翼、旁垂毛、鳴聲九音、有明王則見。

とあり、「龍馬」は、「鬣上有翼」というように、体軀の骨組みの上に翼が生えているとされている。奈良朝の貴族たちによく知られた『芸文類聚』にこうした記述があることの意味は大きいと言えよう。

また、「新大系」は、書簡の「披雲」と、この「空飛ぶ竜の馬」との対応を見出している。「はじめに」の最後に述べて置いたように、書簡の表現と「歌詞兩首」「答歌二首」の表現との関わりを論じる見解が、意外にも無い。右の『新大系』の指摘は、その中にある、重要な指摘となっている。

「龍の馬」の把握については、佐佐木信綱氏『評釈万葉集』、『新大系』の指摘に従うべきであろう。

さてここで、これまでの研究史において取り上げられてこなかった要素を指摘したい。参照すべきは、『文選』(卷十四)の「赭白馬賦」である。もちろん、『文選』(卷十四)の「赭白馬賦」は、右に見たように、早くに『拾穂抄』において紹介されていたわけであるが、その指摘では『周礼』(卷三十三、廋人)にある「馬八尺以上為龍」の方へと流れてしまっている。本稿では、すでに述べて来た「距離」の認識「内在する「距離」という観点から、この『文選』(卷十四)の顔延年の「赭白馬賦」に新たな光を当て、改めてこれを探り上げることとしたい。なお、注は唐の李善の注である。本来は割

注となっているが、ここは見易さを優先し、「(」に入れて李善注であることを明示する。

「赭白馬賦」には、

驥不_レ稱_レ力、馬以_レ龍名。(論語曰、「驥不_レ稱_二其力_一、稱_二其德_一。」周禮曰、「凡馬八尺已上為_レ龍。」……實有_レ騰_レ光吐_レ圖、疇_レ德瑞_レ聖之符_二焉。(尚書中候曰、「帝堯即_レ政七十載、脩_二壇河洛、仲月辛日禮備。至_二于日稷_一、榮光出_レ河、龍馬銜_二甲赤文綠色_一、臨_二壇吐_二甲圖_一。宋均曰、「稷、側也。」黃伯仁龍馬賦曰、「或有_二奇貌絶足_一、蓋為_二聖德_一而生。」疇、昔也。)是以語崇_二其靈_一、世榮_二其至_一。(傍線、廣川。以下同じ)

とある。ここでは、傍線部のように、優れた馬が「龍」と名づけられることが記されている。

また、この「赭白馬賦」で注目されるのは、次の、

……蓋乘_レ風之淑類、實先_レ景之洪胤。(崔駰七依曰、「服飛兔之中乘、騁華駉之駿輪、臨_二虛騰_二雲、乘_二風度_二津_一。」漢書楊雄河東賦曰、「六_二先_二景之乘_一。」劉邵魏明帝詠曰、「先皇嘉_二其誕_一、受_二洪胤_一。」)

の部分である。新釈漢文大系版『文選』(高橋忠彦氏は、傍線部「乗_レ風之淑類、實先_レ景之洪胤。」を、「これこそ、風に乗るといわれた名馬の同類であり、影よりも早く走るといわれた名馬の子孫であった。」と訳している。ところで、この部分では、李善注の記述が重要である。奈良朝の貴族官人たちは、『文選』の受容に際し李善注をも併せて読んで受容していた。この李善注には傍線部にあるように、「虚を臨み雲に騰り、風に乗り津を度る。」とあるのであり、虚空に

飛び上がって雲の高さまで駆け登り、疾駆する名馬の姿が示されていることになる。

また、この「赭白馬賦」の少し先には、

超擲絶^二夫塵轍^一、驅驚迅^二於滅没^一。〔劉歆遂初賦曰、「馬龍騰以^二超擲^一。……」〕

という記述がある。この「超擲絶^二夫塵轍^一、驅驚迅^二於滅没^一」について、新釈漢文大系版『文選』（高橋忠彦氏）は、「躍り上がれば、地面を離れ、疾走すれば、かの滅没より早い。」と訳す。そして、ここでも李善注の記述が参照されよう。この李善注には、「馬龍騰以^二超擲^一」という記述がある。「騰」の表現があるように、「龍」と名付けられる名馬が虚空に飛び上がることが描かれている。

さらに、この「赭白馬賦」の次の記述に注目しよう。

……眷^二西極^一而驪^レ首。望^二朔雲^一而蹀^レ足。〔漢書天馬歌曰、「天馬來、從^二西極^一。又曰、「武帝得^二烏孫馬^一、名^二天馬^一、後更名^二西極馬^一。鄒陽上書曰、「交龍驪^レ首。……」〕

李善は注で、『漢書』（卷二十二、礼楽志）の「天馬歌」を引用している。この『漢書』が、日本上代の知識人にとって重要な位置にあり、大学寮の文章の学科で『文選』『爾雅』と同様に重んぜられていたことは、すでに確認した。右の例によってここで指摘しておきたいのは、奈良朝の貴族たちは、『漢書』本体ばかりでなく、『文選』李善注においても、「重層的」に『漢書』の記述に触れることになる、ということである。

奈良朝の貴族官人たちは、『文選』「赭白馬賦」を読む過程で、以上取り上げた李善注をも併せて読んだ。そしてそのことで、「龍」と

名付けられる名馬が、虚空に飛び上がり雲の高さまで駆け登り疾駆する姿で描かれていることを受容した。このように、李善注を含んだ『文選』の受容においても、「龍の馬」と「天馬」との間の通路が確保されていると言えよう。

ここで、『万葉代匠記』（初稿本）の「龍の馬」についての記述を参照してみよう。

雄略紀云。九年秋七月壬辰朔、……其馬時渡略而龍^{コトクニト}。翫^{コトクニト}。斂^{コトクニト}。聳擢而鴻驚。異体蓬生殊相逸発。伯孫就視而心欲之。……爾乃赤駿超擲絶^二於埃塵^一、驅驚迅^二於滅没^一。……欽明紀云。七年秋七月、……及^レ壯鴻驚龍^{コトクニト}、翫^{コトクニト}、別^{コトクニト}輩越^レ群。……

このように、契沖は、『日本書紀』の二箇所の記述を引用している。契沖の指摘に従って、『日本書紀』の記述を見てみよう。まず、『日本書紀』（雄略天皇九年秋七月条）には、

壬辰の朔に、河内国が言さく、「飛鳥戸郡の人田辺史伯孫が女は、古市郡の人書首加竜が妻なり。伯孫、女の児産めりと聞き、往きて鯉の家を賀きて、月夜に還り、蓬萊丘の菅田陵の下に、……赤駿に騎れる者に逢ふ。其の馬、時に渡略して竜のごとく翫^{コトクニト}び、斂^{コトクニト}に聳擢して鴻のごとく驚く。異体は峰のごとく生り、殊相は逸として発てり。伯孫、就きて視て、心に欲す。……」

とある。新編日本古典文学全集版『日本書紀』は、頭注において、『文選』「赭白馬賦」の表現が利用されていることと説いている。次に、『日本書紀』（欽明天皇七年秋七月条）には、

倭国の今來郡の言さく、「五年の春に、川原民直宮、宮は名なり。楼に登りて眺望し、乃ち良駒を見つ。紀伊の国の漁者の鰐負せる草馬

が子なり。影を脱て高く鳴え、軽く母が脊を超ゆ。就きて買ひ取る。襲養ふこと年を兼ね。壮に及びて鴻のごとくに驚き、竜のごとくに驚り、輩に別に群を越えたり。……服御すること心の随に、馳驟すること度に合へり。大内丘の壑十八丈を超え渡る。川原直宮は檜隈邑の人なり」とをす。

とある。ここでも、新編日本古典文学全集版『日本書紀』は、頭注において、『文選』「楮白馬賦」の表現が利用されていることを説くが、その利用が『文選』「楮白馬賦」の表現の順序を変えての作文であることを指摘している。咀嚼のうえでの受容ということになろう。この『日本書紀』の受容の点からも、『文選』「楮白馬賦」は、日本上代の貴族たちによく知られたものだったということが言えよう。また、加えて参照しておきたいのが、『芸文類聚』(巻九十三、獸部上、馬)の記述である。

漢天馬歌曰、太一睨、天馬下、沾赤汗、沫流赭、志傲儼、精摧奇、籀羅浮雲、掩上馳、體容與、逝萬里、選音近、超踰也、今安匹、龍為友、又曰、天馬來、從西極、涉流沙、九夷服、天馬來、歷無草、徑千里、循東道、天馬來、開遠門、竦予身、逝崑崙、天馬來、龍之媒、遊閭闔、觀玉臺、選音近、超踰也、ここでも、先ほどの『文選』「楮白馬賦」の李善注と同様に、『漢書』(巻二十一、礼樂志)「天馬歌」が引用されている。この『芸文類聚』が、奈良朝の貴族たちが読み受容した書物であることを考え合わせれば、「龍の馬」と「天馬」との通路が、より重層的に確保されていることがわからう。

ここまでの考察に基づいてまとめよう。『漢書』および李善注を含

んだ「楮白馬賦」を収載する『文選』は共に、日本上代の貴族官人たちにとって重要な書物であった。また、『芸文類聚』は、奈良朝の貴族たちによく読まれた書物であった。そこには、「龍の馬」と「天馬」とが通じ合う通路が、重層的に確保されていたわけである。上代奈良朝の貴族官人たちは、右の書物をおして、龍と友であり「龍」と名付けられる名馬が、虚空に飛び上がり雲の高さまで登り疾駆し、また、万里を跳び越える姿で描かれている表現に出会ったのである。さて、こうした表現の質を持つ「龍の馬」を、八〇六番歌では用いているのである。こうした表現の質を理解したうえでは、この「龍の馬」という表現が用いられている意味を次のように見定めることができるであろう。つまり、「龍の馬」は、万里を跳び越え、天を翔る「天馬」を喚起する表現として、大宰府と奈良の都との間の「距離」を表わし出し、その「距離」を認識させる役割を十分に果たしているということである。

(4)「龍の馬」という歌材をめぐる

従来の研究史では問題とされず、必然、明らかにされて来なかったもう一つの問題として、なぜ「龍の馬」を歌うのか、つまり、なぜ「龍の馬」という歌材を用いるのかという点がある。次にはこの点を考察したい。

先ほど見た『文選』(巻十四)「楮白馬賦」には、

……脊西極而驤首、望朔雲而蹀足。(漢書天馬歌曰、「天馬來、從西極。」又曰、「武帝得烏孫馬、名天馬、後更名西極馬。」鄒陽上書曰、「交龍驤首。」……)

という記述があった。その「脊西極」の記述を見てみよう。

「脊」は『説文解字』（四篇上、九才）に、「顧也」とある。⁽²⁶⁾また、『篆隸万象名義』（第一帖、九五ウ）にも同様に「顧也」とある。⁽²⁷⁾「西極」つまり、中国の西の果てを顧みているわけである。「馬以龍名」という名馬（虚空に飛び上がり雲の高さまで駆け登り疾駆する天馬）は、なぜ「西極」を顧みるのか。それを李善注は奈良朝の貴族たちおよび現代の我々に教えてくれる。李善は、

漢書天馬歌曰、「天馬來、從西極。」又曰、「武帝得烏孫馬、名二天馬、後更名西極馬。」

と注している。つまり、この龍馬・天馬は、「西極」の生まれなのであった。全釈漢文大系版『文選』（小尾郊一氏）は、「生まれ故郷の西極の地」と記し、新釈漢文大系版『文選』（高橋忠彦氏）は、「故郷の西の果て」と記している。

また、さきほどの『芸文類聚』（卷九十三、獸部上、馬）にも、漢天馬歌曰、太一祝、天馬下、沾赤汗、沫流赭、志傲儼、精摧奇、籟籟浮雲、唼上馳、體容與、遡三萬里、遡音逝、超騰也、今安匹、龍為友、又曰、天馬來、從西極、……とあった。また、この内容は、『史記』（卷二十四、樂書）にも、

歌曲曰、「太一貢兮天馬下、霑赤汗兮沫流赭。騁容與兮蹕萬里、今安匹兮龍為友。」後伐大宛得千里馬、馬名蒲梢、次作以為歌。歌詩曰、「天馬來兮從西極、經萬里兮歸有德。……」

とある。「西極」が龍馬・天馬を産するところという觀念が、中国においてあったこととなろう。そして、日本上代の貴族官人必読の書であった『史記』、『漢書』、李善注を含めた『文選』にこの「天馬歌」があることから、また、奈良朝の貴族たちに読まれた『芸文類聚』

にもこの「天馬歌」があることから、日本においても、この「西極」が龍馬・天馬を産するところである」という觀念は、取り込まれていたと理解してよいであろう。

ここでは、この「西極」に注目したい。つまり、当時の「日本」の版図を考えた時、大宰府は「日本」の「西極」としての位置にあるのである。大宰府での歌として、八〇六番歌、

龍の馬も 今も得てしか あをによし 奈良の都に 行きて来むため

が歌われるわけであるが、この「龍の馬」とはまさに、「西極」を喚起する歌材であったと言える。

ところで、この歌では、「龍の馬も 今も得てしか」と歌われるのであるから、この「今も得てしか」という表現からも理解を深めなくてはならない。

まず、「今も」という表現の把握においては、『万葉集全釈』の、今にても直ちに得たいといふのか、或は、昔あつたといふ龍馬を現代に於ても手に入れたといふのか、両様に考へられる。

という記述を参照すれば、一応二つの可能性があることになる。結局、『全釈』は、「恐らく後者であらう。」と述べている。しかし、それでよいのであろうか。森本治吉氏『万葉集総釈』は、「今もとは今直ちに、といった意と思はれる。」と把握する。『全釈』と『総釈』、どちらが適切なのであろうか。そこで、参照されるのが次の『万葉集』の歌である。

現にも 今も見てしか 夢のみに 手本まき寝と 見れば苦し
も或本の歌の発句には「我妹子を」と云ふ（12・二八八〇）

当該歌のように「得」ではないが、「今も」「てしか」があり、参照されよう。二八八〇番歌の作中の叙述の主体「へわたし」は、恋の相手と夢の中だけでしか逢えない状況であった。夢の中の共寝、それは、夢が覚めた時の現実には共寝できない状況との落差を一層大きくする。これではあまりにも苦しいので、夢ではない現実でも今すぐにでも逢いたい。そのように切実な恋心を歌うのがこの二八八〇番歌である。この歌の「今も見てしか」を、「以前逢ったことがあ

るのだが今もまた」というように取るべきではないだろう。逢えない苦しさに苛まれるぎりぎりの「今」が、この歌の中では屹立していると言えよう。「今すぐにでも」と解釈すべき例である。

当該歌も、今すぐにでも龍の馬を得たい、と理解すべきであろう。これまで確認して来たように、当該の書簡と八〇六番歌の中には、大宰府と奈良の都との間の〈距離〉が内在していた。その〈距離〉に対する認識があつたのである。そしてさらには、テキスト上で、この八〇六番歌と「大宰帥大伴卿」という注記とが結び付いているありようをも考え合わせたい。まさに、大宰府に居る「今」ということになるのであり、そのどうしようもない〈距離〉に苛まれている大宰府における「今」が、この八〇六番歌の中で屹立していると言えよう。

次に、「てしか」という表現について参照しておきたいのが、日本古典文学大系版『万葉集』の、
テシカ・テシカモは、不可能なことを知ながら、もしもそれが
可能なら……したいという意を表わす。

という記述である。つまり、「龍の馬」を得ることは不可能なことと

知りながら、「得てしか」と欲してしまうのである。

このように、この八〇六番歌では、〈日本〉の「西極」である大宰府に居て、奈良の都との間のどうしようもない〈距離〉に苛まれている「今」においては、「西極」で産するという「龍の馬」を、不可能とは知りながらも得たいものだ、と歌われるのである。

(二)〈距離〉を前提としての交情

八〇七番歌、

現には 逢ふよしもなし ぬばたまの 夜の夢にを 継ぎて見
えこそ

には、「現には 逢ふよしもなし」とある。ここには、八〇六番歌において認識された〈距離〉を前提としての、相手に逢えないことの現実認識があると言えよう。次の歌、

現には 逢ふよしもなし 夢にだに 間なく見え君 恋に死ぬ

べし (11・254四)

は、初句・二句が当該歌とまったく同じであるが、その現実認識の度合いにおいては、当該歌とは逕庭が大きいであろう。つまり、当該歌では、「歌詞兩首」の一首目としての八〇六番歌において、大宰府と奈良の都との間の埋めがたい〈距離〉が提示されていた。その一首目の表現を受けて、この二首目においては、「現には 逢ふよしもなし」という現実認識があるということに留意したい。

『万葉集攷証』は、「一首の意は、道の遠ければ、現に相よしなれば、せめて、夢にだにもつゞきて見えよかしといふなり。」と指摘し、金子元臣氏『万葉集評釈』は、

龍の馬も出来ない相談、「現には逢ふ由もなし」と自覚するに至つては、当てにならぬ夢を当てにするより外はなくなる。

と指摘する。この「自覚」という把握は、まさに適確なものと言えよう。

こうした、「距離」の認識を前提とし、現実には逢えないという「自覚」に基づいて、八〇七番歌「ぬばたまの夜の夢にを 継ぎて見えこそ」、八〇九番歌「したへの枕去らずて 夢にし見えむ」という交情がなされているのである。

三 筑紫文学園の官人としての歌い方

右に見たように、八〇六番歌は、「龍の馬」という表現によつて「距離」を認識させることにおいて機能していたが、その機能という面で捉えれば、この八〇六番歌の表現には、別の機能も含まれていることがわかる。その機能を見易くするために、この八〇六番歌と答歌である八〇八番歌を並べてみよう。

龍の馬も 今も得てしか あをによし 奈良の都に 行きて来む

ため(5・八〇六)

龍の馬を 吾れは求めむ あをによし 奈良の都に 来む人

のたに(5・八〇八)

このように、二つの歌の四角囲みの間には違いがある。八〇六番歌の「行きて来む」は、都に行つて再び大宰府に帰つて来ることを表わしている。ここに焦点を当てて、この歌の機能を追究しよう。

当該歌と同様に「行きて来」ことを歌っている歌に、左の歌があ

る。

唐国に 行き足らはして 帰り来む ますら健男に 御酒奉る
(19・四二六二)

国巡る あとりかまけり 行き巡り 帰り来までに 斎ひて待
たね(20・四三三九)

難波道を 行きて来までと 我妹子が 付けし紐が緒 絶えに
けるかも(20・四四〇四)

四二六二番歌は、題詞に「閏三月於三衛門督大伴古慈悲宿祢家 餞三之入唐副使同胡麻呂宿祢等一歌」とあり、左注に「右一首多治比真人鷹主壽三副使大伴胡麻呂宿祢一也」とある。傍線部は、これから旅立つ遣唐副使の大伴胡麻呂への予祝の表現となっている。大伴胡麻呂が唐の国に行き十分に任務を果たして、本郷である日本そして奈良に帰つて来ることが歌われている。四三三九番歌と四四〇四番歌は、ともに防人歌である。四三三九番歌の傍線部は、東国から九州に行つて再び東国に帰つて来ることを表わしており、四四〇四番歌の傍線部も、東国から難波(そして九州)に行つて再び東国に帰つて来ることを表わしている。この二首の歌では、本郷である東国に帰つて来ることが歌われている。

一方の当該歌はどうか。当該歌では、大宰府が本郷でもないのに、この大宰府に戻つて来ると歌われているのである。この点について、金子元臣氏『万葉集評釈』は、

筑紫の果から奈良京、想うても遥である。況や地方官は私に任地を離れることは出来ない。そこで寸間を偷んでの往復には、千里汗血の龍馬を得るより外に手はない。

と述べているが、しかし、そうした捉え方は妥当ではないであろう。この点、窪田空穂氏『万葉集評釈』が、「太宰帥としての責任感」と指摘しているのが参考になる。

ところで、森本治吉氏『万葉集総釈』は、都を離れて、文化に乏しい田舎で幾年も滞在する苦痛は、中世武士が勃興して「地方」が「都会」を圧する迄、地方官に共通の嘆であつた。萬葉中では、巻第五の諸作は、巻十七、十八等と共に、最も良くこの感情を現してゐる。此の作の如きも、其の一種である……

と述べている。「地方官に共通の嘆」は、あくまでも一般的にはそうであつたと認められよう。大伴旅人であれ山上憶良であれ、そうした心情と無縁ではあり得なかつたことは想像に難くない。しかし、波線部「此の作の如きも、其の一種である」としてしまつたのでは、肝心なところで見誤つてしまうことになるのではないか。こう捉えたのでは、このテキストのありようと齟齬を来すからである。テキストは「行きて来む」とあるのである。「行きて来む」と歌うことにより、むしろ、『総釈』が言う「地方官に共通の嘆」とは正反對の感情が表明されていると言えよう。そして、さらに、ここでは、

○「行きて来む」という表現があること。

○「大宰帥大伴卿」と作者名が注記されていること。

これらをどう複合的に捉えるかが問題となろう。「歌詞兩首」の下に小字で記されている「大宰帥大伴卿」という注記は、旅人本人以外の或る人が付けた注記と捉えられる。事実としてはそうであろうが、テキスト上では、この注記によって、この歌が、「遠の朝廷」大宰府

の長官大伴旅人の歌であることを（表明）しているのである。右に見た窪田空穂氏『万葉集評釈』は、「太宰帥としての責任感」と説明していたが、大伴旅人個人の感情にどれだけ帰結できるかは別として、テキスト上で、結果、「大宰帥大伴卿」としての任務の意識が標榜されていることとなる。いわば、「良吏」としての言説があるのであり、「良吏」が標榜されていると言えよう。

ここで参照したいのは、次の山上憶良の歌である。

天飛ぶや 鳥にもがもや 都まで 送り申して 飛び帰るもの

（五・八七六）

八八二番歌の左注に「憶良謹上」とあり、この歌が憶良の作であることがわかる。そして、筑前国守山上憶良が「謹上」するのだから、この歌は大宰帥大伴旅人に「謹上」されたものであることがわかる。また、八七六番歌の題詞には「書殿餞酒日倭歌四首」とあり、「餞酒」とは、近々帰京する大伴旅人の送別の宴であることがわかる。この八七六番歌では、大伴旅人を都まで送り届けることが歌うのではない。大伴旅人を都に送り届けて、再び九州まで戻って来ることが歌われているのだ。ここには、帰つて来なくてはならないという「自覚」が示されていると言えるのであり、この点、鄙に放たれた貴族の「自覚」の（標榜）という問題まで射程が延びるであろう。また、筑紫文学圈全体としての問題まで射程が延びるかもしれない。

四 まとめ

大宰府に居る「今」、大伴旅人は、「龍の馬」という表現を用いて

いる。その表現を用いることによって、大宰府と奈良の都との間の〈距離〉を、書簡の中だけでなく歌の中にも構築することができている。また、「西極」は「龍馬」「天馬」を産する所という觀念が中国においてあったことは、『史記』、『漢書』、李善注を含めた『文選』、『芸文類聚』の記述によりわかるが、『史記』、『漢書』、李善注を含めた『文選』が日本上代の貴族官人必読の書であったこと、および、『芸文類聚』が奈良朝貴族によく読まれた書であったことは、日本においてもこうした觀念が底流していたことを物語る。このコードに基づいて、大宰府において「龍の馬も今も得てしか」と歌うことは、大宰府が〈日本〉の版図の「西極」であることを強く喚起させる。この点からも、大宰府と奈良の都との間の〈距離〉が認識されるのである。そして、そうした〈距離〉を前提として、「歌詞兩首」と「答歌二首」との間での交情がなされているのである。

また、八〇六番歌の特筆すべき表現として、「奈良の都に行きて来む」という表現がある。これは、奈良の都に行つて大宰府に再び帰つて来ることが歌われている点で、「遠の朝廷」である大宰府の官人としての任務の意識が〈標榜〉される機能をも持つ。この歌への「答歌」である八〇八番歌は表現が似通いすぎていることから「鸚鵡返し」の歌との酷評が与えられているが、自らの許へ来ることだけを取り上げて「奈良の都に来む人」と歌うことは、「答歌」として立派にずらして答えていることになる。この点を看過すべきでない。そして、奈良の都における答歌に「奈良の都に来む人」とあることは、かえつて、大宰府における歌に「奈良の都に行きて来む」、すなわち大宰府に再び帰つて来ると、言い表わす表現との〈対比〉を、テキ

スト上に生じさせて、大宰府の官人としての任務の意識の〈標榜〉を強調することとなっている。

本稿は、「はじめに」において挙げた「袋小路」から脱して、この一連の書簡と贈答歌の「表現の質」を追究することを目指した。この「まとめ」において右のように述べて、本稿のまとめとしたい。

注

- (1) 本稿において掲げている当該の書簡・題詞・贈答歌の原文は、鶴久氏・森山隆氏編『万葉集』（おうふう）を底本として、閲覧可能な写本は複製にて確認し閲覧不可能な写本は『校本万葉集』の記述を参照し、本文校訂作業を施している。なお、当該贈答歌の書き下しおよびその他の『万葉集』の歌の書き下しの引用は、新編日本古典文学全集版『万葉集』（小学館）に拠り、私に改めた箇所もある。また、本稿における『万葉集』の題詞および左注の引用は、鶴久氏・森山隆氏編『万葉集』（前掲）に拠る。

- (2) この「たに」は現代においては解りづらいが、上代においては諸注が指摘するように用例があり、「たに」と訓詁注釈を施すことができる。その用例とは、『続日本紀』聖武天皇天平勝宝元年四月朔日の宣命第十三詔のうちの「種々の法の中には、仏の大御言し国家護るがたには勝れたりと聞こし召して」の傍線部「たに」であり（原文、「多仁」、「ために」と現代語に訳すことができる部分である。また、「仏足石歌」十八の「人

の身は 得がたくあれば 法の為^たの 因縁となれり 努め
諸々 進め諸々」の傍線部(原文、「多」を見れば、「た」一
音で「ため」の意となる例を見出すことができる。なお、こ
の注(2)における、『続日本紀』の引用は、新日本古典文学
大系版『続日本紀 三』(一九九二年一月、岩波書店)に拠
る。また、「仏足石歌」の引用は、日本古典文学大系版『古代
歌謡集』(一九五七年七月、岩波書店)に拠る。

賀茂真淵『万葉考』も同様に「大伴淡等、大伴旅人卿へこたへ
まつる文」と解しているように、「大伴淡等」と大伴旅人とは
同一人であることに気付いていない。

(4) 『校本万葉集』を参照。次点本では紀州本・細井本・廣瀬本、
仙覚新点本寛元本系統では神宮文庫本、仙覚新点本文永本系
統では西本願寺本・陽明文庫本・温故堂本・近衛本・大矢本・
京都大学本、他に活字無訓本・活字附訓本・寛永版本。

(5) 『増訂万葉集全註釈』(一九五七年六月)も同じ内容である。
『莊子』の引用および該当箇所の通釈の引用は、全釈漢文大系
版『莊子』(赤塚忠氏)に拠る。

(7) 『セミナー万葉の歌人と作品 第五巻 大伴旅人・山上憶良
(二)』、二〇〇〇年九月、和泉書院。

(8) 『万葉―その探求』、一九八一年四月、現代創造社。初出、『同
題』、『関西大学東西学術研究所紀要』三、一九七〇年三月。

(9) 『語学文学』(北海道教育大学国語国文学会) 一二、一九七四
年三月。

(10) 『万葉表記論』、一九七六年一月、塙書房。この「巻五の論」

の端書に、初出は『国語と国文学』一九六〇年六月号・七月
号の「万葉集巻五の音仮名に就いて」であること、書き改め
て著書『万葉表記論』に収めたことが記されている。

(11)

村山出氏「歌詞両首——基礎的考察——」(『奈良前期万葉歌
人の研究』、一九九三年三月、翰林書房。初出、『歌詞両首』

——大伴旅人と京人の贈答——、『小樽商科大学人文研究』
八四、一九九二年八月)も土田知男論文と同様の見解を示し
ているが、新たな調査結果を示している。つまり、『万葉集』
巻五に載る「大伴淡等謹状」の八一〇番歌(「琴の娘」の歌)・
八一一番歌(「僕」の歌)の表記に着目し、「琴娘」の歌には
旅人の用字表にはない「武」が用いられている。」と確認した
うえで、「明らかに作者は旅人のはずなのに、作中の人物が異
なれば、表記にも異なる文字を用いていることが知られる。」
と指摘するのである。示唆的な調査であるが、ならば、当該
の八〇八・八〇九番歌の「む」の表記も、旅人の用いない「武」
であるならば、より「別人の作なることを装う」(土田論文)
という目的を完遂できるのではないだろうか。しかし、当該
の八〇八・八〇九番歌の「む」の表記は、「旅人の用字表」に
有る「牟」である。やはり、用字法を論点として「別人の作
なることを装う」手法を論ずることは一筋縄ではないと言え
ようし、その難しさも表われていると言えよう。

(12)

『セミナー万葉の歌人と作品 第四巻 大伴旅人・山上憶良
(一)』、二〇〇〇年五月、和泉書院。

(13)

『セミナー万葉の歌人と作品』シリーズ諸冊の冒頭に共通して

載る「はじめに」の、冒頭の文言。

- (14) 引用は、古典索引刊行会編『萬葉拾穂抄影印・翻刻（附・影印CD-ROM）Ⅱ（巻五〜九）』（二〇〇三年一〇月、塙書房）に拠る。

- (15) 『上代日本文學と中国文學 中——出典論を中心とする比較文學的考察——』、一九六四年三月、塙書房。

- (16) 『萬葉集大成 第七卷 様式研究 比較文學 篇』、一九五四年一〇月、平凡社。

- (17) 『上代日本文學と中国文學 上——出典論を中心とする比較文學的考察——』、一九六二年九月、塙書房。

- (18) 『萬葉集における中國文學の受容』、二〇〇三年一〇月、塙書房。初出、「萬葉集比較文學事典」、別冊國文學 萬葉集事典、一九九三年八月、学燈社。

- (19) 引用は、『漢書』（中華書局）に拠る。引用の左側の傍線は原文のとおり。

- (20) 顔師古注の引用も、『漢書』（中華書局）に拠る。

- (21) 引用は、『芸文類聚』（上海古籍出版社）に拠り、返り点を施した。

- (22) 引用は、『十三經注疏 周礼』（中文出版社）に拠る。

- (23) 引用は、『文選 附考異』（芸文印書館）に拠り、李善注も引用した。なお、全釈漢文大系版『文選』（小尾郊一氏）、および、新釈漢文大系版『文選』（高橋忠彦氏）の記述を参照し、句点等を施した。

- (24) 奈良朝の貴族官人たちが『文選』の受容に際し李善注をも併

- せて読んで受容していたことは、小島憲之氏『上代日本文學と中国文學 中——出典論を中心とする比較文學的考察——』（一九六四年三月、塙書房）に詳しい。小島憲之氏『漢語逍遙』（一九九八年三月、岩波書店）の「はしがき」にも、李善注を活用することの大切さが説かれている。なお、『文選』李善注の活用方法について、文部科学省科学研究プロジェクト「東アジア古典学としての上代文学の構築」（研究代表者 東京大学大学院神野志隆光教授）の分担研究者である北海道大学大学院身崎壽教授主催の「日本漢文学特別講義 漢籍の受容——『文選』の場合——」（二〇〇八年一月八日、於北海道大学）において、『文選』と『萬葉集』——李善注をめぐって——と題して発表する機会を得た。参照、<http://fusshime.c.u-tokyo.ac.jp/eastasia/j/activity/index.html>。
- (25) 引用は、新編日本古典文学全集版『日本書紀』（小学館）に拠る。
- (26) 引用は、『説文解字注』（上海古籍出版社）に拠る。
- (27) 引用は、『高山寺古辞書資料 第一』（東京大学出版会）に拠る。
- (28) 引用は、『史記』（中華書局）に拠る。引用の左側の傍線は原文のとおり。
- (29) 『窪田空穂全集』（一九六六年六月）も同様の記述。

（ひろかわ あきてる・甲南大学教授）